

関東信越税理士会 長岡支部 長賞

私たちが生きる未来を想って

長岡市立小国中学校

三年 湯本 羽那

税金。社会を支えるために国民が納める金銭のこと。調べてみるとそんなことが書いてあった。税金の話はあまり良い印象をもたない。ニュースを見れば増税だ、かと思えば減税だ、とよく話題になっているのを見るからだ。確かに私たちができないようなことを国が行うために税金が必要になるということは知っている。だが、どうしても直接的な実感が湧いてこず、他人事のように感じてしまうのだ。しかも私たち中学生に関係のある税は主に消費税であり、普段の生活で欲しいものを買うときに差し引かれるというような「負担」のほうが大きいのと思っていた。

そんな私の気持ちが変わるきっかけとなったのは、社会の授業の一環として行われた租税教室だ。税理士の方から税金はなぜ必要なのか、どんなことに税金は使われているのかなどの話を聞いた。その中で印象に残った話がある。令和七年度の一般会計予算を使つての現在の日本の財政についての話だ。歳出が約百十六兆円なのに対し、税金などによる歳入は約八十七兆円と歳出よりも少なく、その代わりに約二十九兆円の国債が発行されたということ。そしてそれが積み重なり、国債残高が年々増加してい

ること。このままだと将来の世代に大きな「負担」がかかること。主にそんな内容だった。私は驚いた。今まで自分から知ろうとせず、ただ「負担」だと感じて、どこか他人事のように思っていた税金が自分事として迫ってきた。

それから私は、日本の財政の課題を解決するにはどうしたらいいのか、私たちにできることはないのか考えた。まず、根本的な歳出を減らすということだ。どこに税金を使えばいいのか、本当に税金を使うべきところはどこか、よく考える必要がある。歳出を少しでも減らすことができれば、借金の量を減らすことができるだろう。だが、ただ歳出を減らすということだけだと、生活に不便が出てきてしまう。そこで増税をして歳入を増やすという選択肢が生まれるのだ。

ところが、どれだけ国のため、私たちの社会を支えるためだと言われても、少なからず負担になると考える人もいるだろう。はじめは私もそうだったし、今でも増税することに賛成な訳ではない。でも租税教室を通して、その納めた分の税金はこれから生きていく未来の私や社会のための「負担」ではなく、「投資」と考えるようになった。そうやって少し捉え方を変えることで、税に対する意識も変えることができると思う。

私たち中学生は納税者としてまだ社会に大きく貢献が出来ていないかもしれない。今は与えてもらっている側だからこそ、税を納めて社会を支えている人に感謝しながら生活したい。そして、自分が与える側になった時には、税金をきちんと納め、人々に貢献していきたい。